が建てられ、その教会を中心に人々が集住するようになったことによるもので、十七、八世紀までの墓地は公共空間の中心であったという。

第二章「墓碑」。墓碑は生前に特徴的であった故人の性格を死においても保持しようとする個人のアイデンティティを重視したもので、個人別の墓碑は五世紀には消え、十字架の彫刻という匿名なものにかわるが、十二世紀には上層の聖職者・平信徒において、十六世紀には一般の層においても匿名性が消失し、墓碑像・銘が復活する。これは識字能力と読書の普及に照応するものという。また刻まれた墓碑像がはじめ休息を意味する横臥の姿勢であったものが、祈禱像・肖像へと変化する過程を論ずる。

第三章「家から墓まで」。臨死の人の部屋がかつては大勢の人で一杯であったものが、中世には聖餐と終油をさずける聖職者とわずかな近親の人の立会いのみとなり、死の私化が進む一方で、簡素なものであった葬列が次第に世俗的で荘厳なものへと変化し、埋葬よりも葬送と教会でのミサに比重が置かれるようになった過程を論ずる。

第四章「あの世」。肉体から離れた魂の行方、煉獄と最後の審判を問題とする。中世に流布し、死にゆく人の心の準備を説いた「往生の術」は死生観を明らかにするものとして興味深い。

第五章「すべては空なり」。寄生虫に蝕まれた死体で表現された死が十六世紀には乾燥した骸骨で示されるようになる。そのことは骨格がもつ匿名性の故に死が個性を失なうことを意味し、同時に「死を想え」という伝統的な役割が骸骨にとってかわることによって、人々に虚無の感覚をもたらしたという。

第六章「墓地の回帰」。十七世紀末から都市ではブルジョワジー、親方職人たちが死を越えてまで自らのアイデンティティを求めて己れの履歴を記した墓をもつようになり、十九世紀には誰それの別なく遺体を積み重ねる方式をやめ、遺体と墓との一致を求めるようになった経緯を述べる。

第七章「他者の死」。かつてはいくつかの場所に封じ込められていた死が十九世紀には到る処に死が存在するようになるとともに、自らのために怖れおののく死ではなく、愛する人を奪い去る死、他者の死となったという。

第八章「そしていま」では現代のイラストやベルイマンの映画のなかに現代人の抱く死のイメージをさぐっている。

（新村　拓）

〔日本エディタースクール出版部刊　一九九〇年　菊判　四二三頁　四、八〇〇円〕

千葉保次著、澤本吉則編

『回春堂　永吉の眼科病院』

これは、回春堂、永吉の眼科病院開創二百年の記念事業の一環として出版された本である。

明治二十六年の「永吉の眼科病院」の全景を描いた銅版画の表紙カバーは暖い雰囲気で、この本を手にしたものを古き良き時代に誘うような懐しさを覚える美しい絵である。

この本は、回春堂、永吉の眼科病院七代目の院長、医学博士、千葉保次先生が著わされ、女子美術大学講師、澤本吉則先生が編集にあたられて上梓されたものである。

平成六年（一九九四）には、初代東壽先生が眼科を始められてから満二百年を迎えられるという永吉の眼科病院の歴史が編まれており、日本全国でも六番目に古いといわれる病院の来し方を豊富な資料が物語ってくれる。

一三六ページにわたる本書の内容は次のような九章より構成されている。

○口絵

新病院、全景、記念館等の美しい十二枚のカラー写真が目を楽しませてくれる。

○あらまし

航空写真を含む資料が各ページに収められ、土地柄、遠祖以来の千葉家の歴史、建物、年表等により永吉の眼科病院のおおよそが紹介されている。

○眼科歴代の人々

二八ページにわたるこの章は、最も多くの紙数をさいており、医業を志した初代以来永吉の眼科病院の累代の医師並びに千葉家の人々が医業の他、数々の農業改革を率先し、農家の副業を奨励し、新しい産業を興し、学校を建設して教育の普及につとめ、地域社会のリーダーとして活躍した数々の業績が語られている。

○千葉眼科記念館

「千葉眼科記念館」として発足した木造の旧診察所の細部、展示品等が豊富な写真によって紹介されており、医史学に興味をもつ人のみならず、建築を学ぶ方も感興をそそられることと思う。

○いずまい、たたずまい

この章では眼科記念館、新病院以外の建物の紹介を中心として書きすすめられているが、歴史と伝統のある名門千葉家の人々が守ってきた生活文化、そこに集ってくる人たちの風習などにも言及されていて、豊富な古い写真がそれを雄弁に物語っている。

○新病院

病院新築にあたっての経過と設計上の注意や特色、各室に備えつけられた最新の眼科器機の紹介が著者、千葉保次先生と設計にあたられた知久董氏のお話を中心に、平面図や多くの写真で紹介されている。

○永吉の目医者さんに

この項には教育者、郷土史家を始め近隣住民の方々が千葉家とのゆかりの声を寄せている。

本書はこうした内容を全般にわたり大変貴重な写真や資料を豊富に採り入れ、その一枚一枚に懇切丁寧な分り易い解説がなされていて、著者、千葉保次先生のお人柄が滲みでている。また、外国の人びとにも大体の内容が分かるように英語の説明も付けられているという編集の配慮もなされている。

このように本書は千葉家並びに永吉の眼科病院が地域社会と如何に深くかかわりながら地域社会のため奉仕活動をされてきたかが刻明に述べられている。この意味で医史学的にみても、また、文化史的な面からも極めて価値のある内容であり、眼科関係の方

や医史学研究者のみならず、一般の方々にも興味深く読んで戴けるものと思う。

（斎藤　仁男）

〔永吉の眼科病院　一九九〇年　A五判　一三六頁〕

矢数道明著『漢方治療百話第七集』

本書の著者は、人も知る日本漢方医学界の最長老であり、北里研・附属東洋医学総合研究所名誉所長をはじめとして東洋医学及び医史学関係の多くの要職にあり、斯界の指導者中万人に認められる第一人者でもある。

昭和初年に、漢方医学が衰退の極にあったとき、大塚敬節、木村長久、清水藤太郎等との共著として『漢方診療の実際』を著して南山堂から発行した。時に昭和十六年十月、この書こそ、漢方医学を、現代医学の知見に合せて解説した書物の嚆矢となった。

以来著者は、多くの著書を著すと共に、種々なる漢方医学復興の為の運動を起して、現在のような東洋医学普及の基を礎いたのである。

本書が、第七集となっているのは、昭和三十五年に、『臨床三十年漢方治療百話第一集』を著して以来、五年毎に続篇を著作して今日に至ったが故である。

本七集は、昭和六十年に第六集を発行したあとの五年間に、著者が著述した論文、総説、随筆その他の総てを、前集と同様に編集したものであるが、序文の中では、五年間のメモ迄が細大漏らさず認められている。その綿密且正確なことは、とてものことに凡人のよく真似のできるところではない。

自序に、昭和六十年から六十四年・平成元年に至る間の各年度毎の、漢方界の行事と著者とのかかわりを、総べて記録しているのがそれである。

本文は、第一編治療篇、第二編論説篇、第三編随筆篇、第四編叢談篇、そして附録に分類されている。

治療篇は、更に頭痛・片頭痛・メニエール病、眼・耳・口・歯・咽、喘息・気管支炎・気管支拡張症、心臓疾患、神経性疾患、胃腸疾患、皮膚病一束、婦人科疾患、肝臓・膵臓・腎臓・膀胱・胆嚢・高血圧、リウマチ・痛風・腰痛・膝関節症、その他に区分され、合計一二六症例が記載され、そのあとに質疑応答（治療関係）「日本医事新報より」が二題追記されている。

記載された症例は何れも、臨床上の難症である。従って、漢方医療を、臨床の実際について習得しようとする人達にとって、この上ない参考資料となろう。

論説篇は、主に漢方々剤の運用などの解説で、九篇にわたっている。

随筆篇は、折々の記録や、著者と関わりの深かった人達への思い出と追憶で、著者の人柄のしのばれる名文集である。

叢談篇は、多くの漢方先哲に関連のある考証の論文や、漢方の近代史等四五篇に及ぶ記載であり、何れも興味深い内容で、筆者などは、読み始めるとつい時の経つのを忘れた。